

翻 訳

戴 裔 煊 著

## 『宋代鈔塩制度研究』(11)

安 藤 幹 夫

### 第三編 鈔塩制度之縱的研究

#### 第一章 交引塩制

- 一 入中折中與交引塩制積義
- 二 入中之嚆矢與利用茶塩折博之倡議者
- 三 解塩之通商與折博
  - (1)宋初解塩東西南三区之通商制度 (2)陝西州軍入中之優潤則例及紐算顆塩方法
- 四 東南塩之通商與折博
- 五 川塩河東塩閩広塩之折博
  - (1)川塩 (2)河東塩 (3)閩広塩

以上，広島経済大学「経済研究論集」第18巻第3号

#### 六 折中倉與塩之折博

- (1)折中倉建置之倡議者及其建置年代 (2)折中倉之規制及入中支塩則例

#### 第二章 引鈔塩制產生存在與時代需要

- 一 入中制度之来由

以上，『広島経済大学経済研究論集』第18巻第4号

#### 二 折中制度之来由

#### 三 引鈔塩制產生之歴史因素

#### 第三章 范祥鈔塩制

- 一 范祥鈔塩制產生之条件
- 二 范祥及其鈔塩制

## (1)范祥之略歴 (2)范祥鈔塩制

## 三 范祥鈔塩制推行之阻力及其推行之效果

以上、『広島経済大学経済研究論集』第19巻第1号

## 四 范祥鈔塩制成功条件之分析

## 第四章 鈔塩制之變遷與頹壞

## 一 薛向對於解塩之措置

(1)罷州県征收塩課 (2)減沿辺八州軍鬻塩価 (3)改善駐夫待遇減少駐夫數額 (4)作小鈔壳解塩 (5)即永興軍置壳塩場

## 二 熙豐間鈔法之頹壞

(1)熙寧末鈔法頹壞之概況 (2)熙寧十年之改革 (3)改鈔以後之狀況

## 三 哲宗時鈔法之概況

(1)確定解塩鈔歲額為二百万緡 (2)陝西沿辺八州軍鬻塩復范祥旧制

以上、『広島経済大学経済研究論集』第19巻第2号

## 四 鈔塩制變遷與頹壞之剖析

## 第五章 鈔塩制及其功能之轉變

## 一 鈔塩制功能轉變之外觀

## 二 鈔塩制轉變之因素

以上、『広島経済大学経済研究論集』第19巻第4号

## 三 崇寧初措置鈔法之講議司

附都省講議司提舉詳定參詳官姓名表

## 四 崇寧大觀間之鈔塩制

(1)蔡京改鈔法之嚆矢 (2)買鈔所之設置與換鈔法 (3)崇寧大觀間之貼納對帶循環法 (4)蔡京崇寧間對於鈔法之其他措置 (5)大觀末之改革

以上本号

## 五 政和宣和間之鈔塩制

## 六 鈔塩制震變之效果與影響

## 第六章 南宋鈔塩制度之推廣

## 一 南宋国用與鈔塩制關係之概觀

(1)南宋国用匱乏之一斑 (2)鈔塩制對於南宋財政上所負之任務

## 二 淮浙塩鈔法之粉更

(1)淮浙塩鈔制之屢更 (2)倉場支塩制度之罷復 (3)淮浙塩之加饒

## 三 閩塩鈔制之推行及其罷止

(1)福建鈔塩制與鈔塩錢 (2)鈔法再行於福建及其罷止原因之剖析

## 四 兩広客鈔官般之起仆

(1)兩広塩官売通商之経過 (2)広西客鈔官般屢罷屢復理由之探討

## 五 趙開蜀塩引制

(1)趙開及其引塩法 (2)趙開引法之功效及其流弊

## 第七章 結論

一 鈔塩制與官般官売制對於宋代財政上所負任務之比較觀

二 鈔塩制之發展與時代需要之關係

三 從鈔塩制研究所得之制度觀

なお翻訳するにあたっては、今回も沙鄭軍氏（本学大学院前期課程修了，前蘇州大学歴史系助理研究員）が素訳を試みた。この場を借りて御協力いただいた沙氏に感謝申し上げたい。

## 三 崇寧の初めに措置して鈔法を変えた講議司

蔡京が鈔法を変えたのは、全く企画の無いこととは言えない。彼が願っていたことを考えてみると、即ち些か為すところがあったと思われる。講議司は即ちその種々の施策を出す所である。『宋史』19徽宗本紀，崇寧元年7月戊子に載して（煇考えるに，この月は甲申がついたち，従って戊子は即ち初5日），蔡京は始めに尚書右僕射兼中書侍郎と為り，甲午に（即ち11日）詔して，都省に講議司を置かせたとある。蔡京は，初めから講議司がいろいろな施策の設計機関であるとして建立したことを，吾々は知っておくべきである。『宋史』472蔡京伝によれば，「京起於逐臣，一旦得志，天下拭目所為，而京陰託紹述之柄，箝制天子，用条例故事，即都省置講議司，自為提挈，以其党吳居厚・王漢之十余人為僚屬，取政事之大者，如宗室・冗官・國用・商旅・塩沢・賦調・牧尹・每一事以三人主之，凡所設施，皆由是出。」とある。講議司についての記載は，ただこのようなごく僅かな数語しかなく，甚だ簡単である。しかしこのような重要な機関は，まさに詳しく研究しなければならない。

蔡京がこの種の設計機関を設立するのを企画したのは，崇寧年間からで

はなく、宋の哲宗の紹聖元年（1094）に彼が戸部尚書と為った時に已に建議があって、彼の奏には、

「神宗皇帝熙寧之初，置条例司，選天下英才，設官分職，參講其事，興利補弊，功烈較者。元祐以來，美意良法，盡遭詆誣。在於今日，正當參酌舊制，考合時宜，以稱陛下追述先帝之志，以成足國裕民之効。然事之可興者，方且毛舉，豈臣單力所能勝任。望聖慈檢熙寧中條例司故事，上自朝廷大臣，下選通達世務之士，同共考究，庶幾成一代之業以詔萬世」<sup>(16)</sup>

とある。

蔡京は、紹聖の初めにこの議があったのに未だ実現させていない。しかし彼は熙寧の初めに条例司を仰ぎ慕い、範を為すことを欲って些か為すところがあり、彼の目的は甚だはっきりしている。徽宗が即位するに及び、即ちその議の実現に良い機会を得たが、当時なぜそれが実現できたのか？その理由は具に徽宗の崇寧元年7月11日の詔に見える。

「朕聞治天下者，以立致訓迪為先，篤孝思者以繼志述事為急。蓋制而用之存乎法，推而行之存乎人。雖夷夏乂安，黎民樂業，而法難一定，事貴變通，損益之間，理宜稽考。況宗室蕃衍而無官者尚衆，吏員冗濫而擬注者甚艱，委積不厚於里閭，商旅未通於道路。廉恥蓋寡，奔競実繁，風俗澆漓，薦舉私弊，塩沢未復，賦調未平，浮費猶多，賢鄙難辨，歲稍飢歉，民輒流離。然制之必有原，行之必有序，設施必有方，舉措必有術。是故俊彥不可以不旁求，法度不可以不修講，宜如熙寧置条例司，都省置講議司，以宰臣蔡京提舉，仍東乃寮，其議因革，庶臻至治，以広詒謀。」

とある。

所謂「法難一定，事貴變通，損益之間，理宜稽考」の数語は、即ちこれは直面している需要があったことを指し、一定の法を以ってしても変化して定めのない時代の要求に応副することはできない。すなわち宗室・冗官・国用・商旅・塩沢・賦調・牧尹等は、屢々大筋では明らかにされているが、時代によって損益を斟酌してみると、それぞれが改制の必要があることが分かる。これをみて、吾々は講議司の設置の理由を明らかにすること

(16) 『宋会要』職官5 講議司崇寧元年7月11日の条の紹聖元年7月23日戸部尚書蔡京の言を参照。

ができた。

吾々は已に講議司がなぜ設置されたかを明らかにしたので、いま更に進んで講議司の組織を探究する。講議司を考証すると、当時蔡京が提挙官と為ったが、提挙官が権力を持っている外に、また詳定官・参詳官・検討官があった。上述の各項政事の大きなものについては、一事ごとに検討官三人を以って主宰させていたが、この種々の官はみな蔡京の奏請によって任命された。当時、樞密院にもまた講議司を置いたが、ただこれとは関係がないのでここでは論じない。ここでは都省が置いた講議の組織及び人物、官階、主宰する政事等を、『宋会要』職官5講議司の条を根拠として、崇寧元年8月4日に蔡京が請したものを次のように列表する。

都省講議司提挙詳定参詳官姓名表

講議司官別	姓 名	官 階	備 考
提 挙 官	蔡 京	尚書右僕射兼中書侍郎	
詳 定 官	吳 居 厚	戸部尚書	此れは宋会要職官5の13に拠る。煇考えるに、統資治通鑑長編拾補22に引用した楊仲良長編紀事本末122徽宗崇寧2年9月壬午の条に「詔講議司詳定官蹇序辰、范致虚・劉賡・張康国、参詳官崔彪、鄭僅各軫一官」とあり、その人名は宋会要と符合しないが、大抵は後に変えられたものがあり、しばらくは詳考できない。ただ原書の注に「蹇序辰翰林学士、范致虚兵部侍郎、劉賡刑部侍郎、張康国中書舍人、崔彪都官員外郎、国用檢討持服人、鄭僅朝散郎直龍圖閣」と言っている。業其は原文に欠名している。
	張 商 英	翰林学士	
	劉 賡	尚書刑部侍郎	
参 詳 官	范 致 虚	起居舍人	
	王 漢 之	太常少卿	
	黎 珣	尚書倉部郎中	
	葉	尚書吏部員外郎	

都省講議司検討官姓名表

検討大政	姓 名	官 階	備 考
宗 室	強 浚 明	朝奉郎少府監丞	亦同前書に拠る。
	李 詩	太常寺主簿	
	鮑 貽 慶	宣教郎	

冗官	李陶節夫	朝散郎	統資治通鑑長編拾補22徽宗崇寧2年9月壬午の条に拠れば、「塩沢房檢討官馮謹輒一官、與開封府推官、呂琮輒一官、與寺監丞、權貨務監官丁維・吳薦、各減二年磨勘、宋康年輒一官、逐路提舉措置官陝西路李愷、河北路韓敦立、京東路郭異、京西路余授、各輒一官、愷先為陝西路輒運判官、仍陞輒運副使」(楊仲良長編紀事本末122を根拠とする)、則ち李愷・韓敦立等は鈔法を改める時には提塩事官と為っており、大抵檢討官を兼ねている。又同前条下の注に拠れば、「馮謹朝清郎元年八月五日為塩沢檢討、馮京子・呂愷、元年八月五日為塩沢檢討」と言っており、「馮京子」が人名かどうかは分からない。それとも馮謹を指して馮京の子としているのか考慮を要する。
		吳儲	
国用	家安国	承議郎	
		王覺	
		崔彪	
財賦	安虞亢防	承議郎	
		林據	
商旅	韓敦立	朝散郎	
		曾詵	
		余授	
塩沢	馮謹	朝奉大夫	
		李愷	
		呂琮	
尹牧	喬方	承奉郎	煊考えるに、原文では僅かにこの二人しか記載されていないが、必ず一人の脱漏があるだろう。
		沈錫	

講議司の官吏を考えると、実はこれだけではない。『宋会要』職官5崇寧3年8月7日の条によれば、講議司を置くのを罷めたあとは、報告された劄子によれば、制置三司条例司の推恩体制によっている。すなわち少数の人を除いて全部は、推恩されて外の機構の官僚に転じて磨勘の年を減ぜられ、彼らには差をつけた量の銀絹を支賜し、列したところの人数を計算すると次のようになる。

(1)朝請郎翰林学士承旨	張康国	(2)大中大夫刑部侍郎	劉唐
※			
(3)通議大夫	張商英	(4)降授朝請大夫提舉杭州洞霄宮	蹇序辰
(5)承議郎充頭議閣待制	范致虛	(6)朝散郎充頭議閣待制	王漢之
(7)承議郎鴻臚少卿	崔彪	(8)朝散大夫衛尉少卿	黎珣

(9)奉議郎司勳員外郎	鮑胎慶	(10)朝散郎庫部員外郎	李 詩
(11)承務郎吏部員外郎	沈 錫	(12)奉議郎礼部員外郎	陳 暘
(13)起復朝請郎充顯謨閣待制	鄭 僅	(14)朝奉大夫	葉 ( )
(15)朝奉大夫少府少監	曾 詵	(16)朝奉大夫充集賢殿修撰	陶節夫
(17)朝奉郎兩浙路提点刑獄	強浚明	(18)承事郎將作監丞	呂 綜
(19)朝奉大夫	朱 維	(20)承議郎祕書丞	汪 漸
(21)皇城使康州刺史	劉宋卿	(22)承議郎	劉 詵
(23)宣德郎監察御史	卓 厚	(24)岳州文学	林 詵
(25)朝請大夫府界提点	馮 謹	(26)承議郎管勾舒州靈仙觀	吳 儲
※		※	
(27)朝散郎監滑州塩酒稅	李 琰	(28)承議郎添差監黃州岐亭鎮酒稅務	虞 防
(29)朝散大夫知北外都水丞	韓敦立	(30)朝散郎直秘閣	李 愷
(31)宣德郎提舉広南東路常平等事	王 寬	(32)承事郎提舉江南北西路常平等事	喬 方
(33)朝請郎	郭 異	(34)承議郎兩浙路轉運判官	胡奕修
(35)奉議郎	呂建中	(36)朝散郎提舉措置福建路茶事	胡安修
(37)承務郎提舉措置淮南路茶事	安 亢	(38)承務郎提舉措置江南東西路茶事	家安国
(39)宣德郎提舉措置荆湖南北夔州路塩事張 莊		(40)朝請郎	余 授
(41)朝奉郎	劉 暉	(42)朝請大夫	宋 湜
(43)奉議郎	裴彦輔	(44)中散大夫尚書省都事提舉司檢閱文字任 充	
(45)太医丞	刑晋卿		
註・※のあるものは、当時推恩陞賞しない。( )内は欠名。			

吾々が『宋会要』によって得た当時講議司に参加した官吏の数は、以上のようなものである。ただし宋の曾敏行の『独醒雜志』巻9によれば、

「蔡元長為相日、置講議司、官吏數百人、俸給優異、費用不貲。一日、集僚屬會議、因留飲、命作蟹黃饅頭、飲罷、吏略計其費、饅頭一味、為錢一千三百余緡。<sup>17)</sup>」

(17) 焄考えるに、曾敏行の『独醒雜志』巻9に記載されている人数及び蟹黄饅頭の消費された錢数は、恐らく誇張され事実を誤っている疑いがある。

と言っている。

官吏の数は『宋会要』職官5 講議司に掲載された上述の外には考見できないが、しかしその人数は甚だ多く、しかもその費用はまた甚だ大きいことは疑いない。人数がこのように多く、経費がこのように大きければ、その得る結果はどうであるか？宋の方勺の『泊宅編』巻6によれば、

「蔡京当国、毎縁制作、置局辟官、不可勝数、其間如欲变冠之制、令稍近古、講求累年、糜費不貲、止易鞵為履而已。」

とある。

方勺の意は、講議司は成績が何もなく、国庫を無駄に虚費するだけのものと認めるのである。事実、蔡京本人もこの点については承知しており、従って崇寧3年4月22日に自ら局を罷めることを請い、

「奉詔置司講議法度、更歷歳年、曾不足仰称委任之意、今文字不多、理当帰之省部、付於有司、乞限一月結局、其未了事件、送尚書省分隸施行。」<sup>(18)</sup>

とある。

詔はその請いに従い、ここにおいて法律を構想し更易する講議司は終わりとした。はじめは塩法関係の種々の措置は、即ち講議司から出されており、講議司が陳請した事項については下文に述べる。

講議司が罷められた後を考えると、宣和6年（1124）に蔡京が復帰した時にまた再び講議司を置き、開封尹兼侍読燕瑛、徽猷閣直学士中奉大夫任諒を以って講議司の詳定官と為し、朝散大夫直秘閣李侗、朝請大夫王雲、承議郎鄭望之、朝奉大夫直秘閣高衛を参議官と為した。<sup>(20)</sup> また戸部尚書唐恪、工部尚書李柁に講議司の詳議官を兼ねさせたが、<sup>(21)</sup> 蔡京がやはり提領を兼ねた。<sup>(22)</sup> ただ、私第の裁処については簽書を免じた。

(18) 本文が引用した方勺の『泊宅編』は『読画齋叢書』10巻本と為る。

(19) 『宋会要』職官5 講議司崇寧3年4月22日の尚書左僕射蔡京の言を参照。

(20) 同前書宣和6年11月18日の条を参照。

(21) 同前書宣和7年4月23日の条を参照。煇考えるに、詳議官が崇寧の初めに講議司と為ったという個所は無く、原文が誤っているかどうかは分からない。

(22) 同前書宣和6年12月1日の詔を参照。



この度の講議司の復置の原因については、宣和7年(1125)5月21日の詔に見え、所謂「今天下歳入之数、悉倍於前、用度費出、不聞有余、殊失量入為出之義。况寇攘就平、流移復業、而広儲足食、務農敦本、尤在所先。凡有司侵漁蠹耗之事、理宜裁抑、可応不急之務、無名之費、令講議司条具以聞、当親加裁定為經常簡易之法」と言っている。則ち、純粹に当時の国家財政の窮迫が原因となっているのである。ただ、この度の講議司の設置は、鈔法とは大きな関係が無く、しかもやがて北宋は滅亡したのでここでは説明を省略する。

欽宗の靖康元年4月12日にまた尚書省に詳議司を置き、祖宗の旧法を討論した。詳議司の名は、講議司を避けて改めたもので、当時の臣僚、例えば左司諫陳公輔等は屢々論じてその名は適當ではないとしたが<sup>(23)</sup>、結局は詳議司となったのである。

事実について論ずれば、司を置いて法律を講議し、公開で検討して、それに適当な人物を用いることを得れば、良い効果を収められないわけでもない。蔡京が講議司を置いて大政を検討したことは、その結果が必ずしも良いものとは言えないにしても、彼の意図は則ち甚だ良いものである。

#### 四 崇寧大観年間の鈔塩制

(1)蔡京の鈔法改正の嚆矢 崇寧の新鈔法はいつ頃から推行されたのか？吾々はまず初めにこの問題を解決しなければならない。『宋史』181食貨志塩上では、ただ崇寧の初めとだけ言っており、その推行の日時には詳及していない。蔡京は崇寧元年7月5日に尚書右僕射兼中書侍郎と為り、11日に都省に講議司を置いたことは上文で已に述べた。講議司の設置の後に、即ち変法の準備を企画していたが、同月29日に臣僚が范祥の旧法を講求して、輕率に改める必要の無いことを請うている（このことについては、前文で引用した『宋会要』食貨24崇寧元年7月29日の条を見よ）。則ち蔡京が鈔法を変えたのは、最も早くても崇寧元年8月以後であるべきことを吾

(23) 同前書職官5の19詳議司の条を参照。

々は推断できる。『宋史』181食貨志上によれば、

「崇寧初……未幾、蔡京建言、河北・京東末塩、客運至京及京西、袋輸官錢六千。而塩本不及一千、施行未久、収息及二百萬緡、如通至陝西、其利必倍、議遣韓敦立等分路提舉。」

とある。

これによって以下のことが分かる。則ち、当時解塩の不足を補うために河北、京東の塩を京師及び京西に運んで放出したこと、商人は権貨務に錢を納めて鈔を買い、産塩の州郡に赴いて塩を受け取ったこと、これらを実施して余り日が経たない内に、蔡京は収入が甚だ多いのを見て、再び商人が塩を陝西で通商することを許し、官吏を派遣して路を分かつて、則ち陝西路は李愷、河北路は韓敦立、京東路は郭異、京西路は余授に提舉させたこと等々である<sup>(24)</sup>。しかし『宋史』食貨志には、ただ「未幾」と言っているだけで未だ月日については明言していない。黃以周等が編纂した『統資治通鑑長編拾補』22崇寧2年9月壬午の条に、楊仲良の『長編記事本末』122を引用しているので考察してみると、

「講議司筭子……自去年九月十七日推行新法東北塩、十月九日客人入狀納算請、（煇考えるに：原注では「狀」の字が『九朝備要』によって増されているが、「狀」の字は常例によれば増入すべきではない）至今年九月三日終、収趁到錢一百六十四万八千六百二十六貫、三百六十八文、本錢一十四万七千七十三貫、息錢一百五十万一千五百五十三貫三百六十八文。」

とある。

これによって、新法の東北塩が推行されたのは崇寧元年9月17日からであったことに疑いは全く無いことが分かる。東南末塩に至っては、以前にもまた客鈔が行われていたといっても、主要なものは官搬であった。崇寧元年に至って蔡京は塩法を変えることを議し、極力商人が販売算請することを奨励した。すなわち商人が私船を用いて運搬することを許し、しかも官船、私船によって阻留させることはなく、このような内容で7条の規定

(24) 『統資治通鑑長編拾補』22崇寧2年9月壬午の条を参照。もとは楊仲良の『長編記事本末』122に載っている。

を定めた。<sup>(25)</sup> 2年に更に詔して「塩舟力勝錢勿輸，用絶遏阻，且許舟行越次取疾，官綱等舟輒欄阻者坐之。」<sup>(26)</sup>とある。蔡京は完全に官搬官売を無視して通商に特に重きを置き，官搬から転じて商販と爲した。その変転の嚆矢はここにある。

(2)買鈔所の設置と換鈔法 解池が壊れる以前は，官が塩鈔を支給していた。すなわち商人を募集して糧草を納入させ，塩を以って返還していたのである。しかし解池が既に壊れて暫くは修復できないのに，沿辺の糴買では，塩鈔は旧法を遵守して支給されていたのである。解池には既に支還する塩は無く，そうなると鈔価はすぐに低落し，交引鋪戸は時に乗じて操縦して，鈔価が安ければ収買し，河北の塩文鈔も同時にまた操縦された。この種の状況の下では沿辺で入中する商人は無く，鈔法もまたこれによって壊れた。崇寧2年(1103)12月2日に講議司はこの状況によって「乞依熙寧・元豐置買鈔所，別以他物折博，(この句は『宋会要』職官27太府寺及び『統資治通鑑長編拾補』22の同年月日の条によって増入した)差權貨務監官二員，別選使臣或選人三員，共同專一管勾，換易客人文鈔，応客人齎到鈔，並以末塩鈔並東北一分塩鈔及度牒，官告雜物等支換。」<sup>(27)</sup>と請い，詔によってその請いに従った。

換鈔の法については、『宋史』182食貨志塩中によれば，

「置買鈔所於權貨務，凡以鈔至者，並以末塩，乳香・茶鈔，並東北一分

<sup>(25)</sup> 『宋史』182食貨志塩中の崇寧元年「蔡京議更塩法乃言東南塩本或闕，滯於客販，請増給度牒，及給封樁坊錢通三十万緡，并列七条・

- 一．許客用私船運致，仍嚴立輒踰疆至夾帶私塩之禁。
- 二．塩場官吏概量不平，或支塩失倫者，論以徒。
- 三．塩商所繇官司場務堰牒津渡等，輒加苛留者如上法。
- 四．禁命吏廩家貢士胥史爲賈區請塩。
- 五．議貸亭戸。
- 六．塩価太低者議増之。
- 七．令措置官博盡利害以聞」。

<sup>(26)</sup> 同前書を参照，力勝錢は考えられず，或いは船が関，津を通過する時に納める費用。

<sup>(27)</sup> 次頁へ

及官告・度牒・雜物等換給。末塩鈔換易五分，余以雜物，而旧鈔止許易末塩・官告。仍以十分率之，止聽算三分，其七分兼新鈔。」

と言っている。

『宋史』のこの文章を突然見ると理解し難いが，当時の権貨務の解塩鈔を収換する方法を見ると，政府は末塩・乳香・茶鈔・東北一分塩鈔・官告・度牒・雜物等で解塩鈔を換易することを規定していた。即ち十分を以て率と為して，ただ末塩鈔5分は換えることを許し，余りの5分は雜物を以て商人に償還した。しかし解塩旧鈔は，末塩，官告の2種に換易することは許さなかった。所謂東北一分塩鈔は，大体全数をもってこれを計算し，東北塩鈔はただ1分を換えてこれに給した。3分7分の数に至っては，則ち鈔を以ての請塩は，配搭する分数を指して言うのである。『宋会要』食貨24崇寧2年12月24日の詔によれば，

「令逐路支給末塩鈔及自般請者，並須三分旧鈔兼七分新鈔支請，如願全以

- (27) 『宋会要』食貨24及び職官27の崇寧2年12月2日の条及び楊仲良の『長編紀事本末』132同年月丁未の条を引用した『続資治通鑑長編拾補』22にともに所載はあるが，各々に食い違いがある。ここに『宋会要』24の文を原文のまま附す。『講義司言』，解池未壞以前，官給解塩鈔，募客人入納糧草，還以鈔塩（『拾補』では「還」上に「逐」の字がある）今解塩未復，其鈔尚循旧法，給解塩文鈔，客人齎赴京（『拾補』では「今解塩未復」から「客人齎赴京」に至る数句は無い）解池既無解塩支還（『拾補』では「解池」の上に「今」の字があり，「支」は「可」となっている），并河北文鈔，売與在京交引鋪戸，乘時邀利，賤價収買，（『拾補』では「邀利價収」の4字は無い），客人虧折財本，浸壞鈔法（『拾補』では「浸」は「侵」となっている），合行措置（『拾補』にはこの句は無い），乞依熙寧元豐置買鈔所（『拾補』では「寧・元・置」の3字は無い），別以他物折博（この句は『宋会要』食貨24には無い，『拾補』及び『会要』職官27にはある。又この句の下に「乞於権貨務置買鈔所」がある），差権貨務監官二員，別選使臣或選人三員同共專一管勾，換易客人文鈔，（『拾補』では「選」の字の上に「差」がある，又「共」以下11文字は無く，改めて「主之」がある）応客人齎到鈔（「鈔」は原作では「錢」，ここに『会要』職官27及び『拾補』によって改正する。又『拾補』は「鈔」の上に「文」の字がある），並以末塩鈔并東北一分塩鈔及度牒官告雜物等支換從之。（『拾補』では「並」を「正」とつくる。「朱」を米とつくるのは誤り。又「支」は「博」とつくる。）」

新鈔請者，不以多少，聽從便支請。」

とある。

この詔は、正に『宋史』食貨志の文の根拠となすべきものである。その意図は、商人が旧鈔を以って請塩し、新鈔が売れなければ則ち政府の収入が無いことを恐れ、従って配搭法を用いて制限を作ったところにある。当時「權貨務買鈔所自崇寧二年十二月四日奉行新法至三年四月十九日終，客人鋪戶投下到陝西・河北文鈔換易過東南末塩等，共計錢五百一万一千三百八十三貫四百一十五文。」<sup>(28)</sup>とあって、その成績は頗る良く、そのために權貨務の監官等は昇級受賞している。

要するに、当時蔡京は極力通泰の煮海の東南塩で客鈔の法を推行することを企画して、一方では解塩の不足を補い、一方ではまた中都に錢を充足した。その結果計画は成功し、「自二年十二月行法至三年十一月，在京已及一千二百余万貫，遂盡罷諸路官（「売」の字を「官」の下に一字加えるべきである），以塩鈔每百貫撥一貫與轉運司，於是東南官売與西北折博之利，盡歸京師，而州県之横斂起矣。」<sup>(29)</sup>となった。

(3)崇寧，大觀年間の貼納法，対帯法，循環法 崇寧，大觀年間に鈔法は屢々更易された。上で述べたものは最初の換鈔法だけで，蔡京の意図は納入を広く求めるものであって，このために形式を更新したが，商人の困弊は顧みられていない。その形式として述べられるものに三種あり，即ち「貼納」「対帯」「循環」がこれである。

崇寧4年の詔に「陝西旧鈔，易東南末塩，每百緡用見錢三分，旧鈔七分。」<sup>(30)</sup>とあり，この種の見錢を貼輸する法は，これを「貼納」と言った。5年にまたその制を改めて「商旅赴權貨務換請東南塩鈔，貼輸見緡四分者，在旧三分之上，五分者在四分之上，且帶行旧鈔，輸四分者帶五分，輸五分者帶六分，若不願貼輸錢者，依旧鈔価減二分。」<sup>(31)</sup>とあり，この種の旧鈔を

(28) 『宋会要』職官27太府寺崇寧3年5月7日の中書省の言を参照。

(29) 『文献通考』15征權考2に引用した陳止齋の語を参照。

(30) 『宋史』181食貨志上を参照

(31) 同前書を参照。

帯行する法は、これを「対帯」と言った。同年また詔して「算請不貼納見錢以十分率之、母過二分、大觀元年（1107）、乃令算請東南末塩貼輸及帶旧鈔如見条外、更許帶日前貼輸三分塩鈔、輸四分者帶二分、五分者帶三分、後又貼輸四分者帶三分、五分者帶四分、而東南塩並收見緡換請新鈔者、如四分五分法貼輸、其換請新鈔及見錢算東南末塩、如不帶六等旧鈔者、聽先給、如止帶五等旧鈔、其給塩之叙、在崇寧四年十月前所帶不貼輸旧鈔之上。六等者謂貼三、貼四、貼五、当十鈔、並河北公拋、免貼納錢是也。」とある。<sup>(32)</sup>

何を「循環」と言うのであろうか？『文献通考』16征榷考3によれば「循環者、已売鈔、（原文では「売」の上に積の字があるが『宋史』182食貨志によって削除する）未授塩、復更鈔、已更鈔、塩未給、復貼輸錢、凡三輸錢、始獲一直之貨」と言っている。

当時鈔法はあつという間に改められるので、商人は錢を支払って新鈔を換易しても、未だ請領した塩を得ることができず、しかもその間に鈔はまた変えられて新鈔が出る。新鈔が出れば旧鈔は用いられず、また錢を貼納して新鈔を取得しなければならず、はじめてここで旧鈔を帯行して請塩することができる。やがてまた貼納しても鈔がまた変わり、しかも新鈔がまた出てまた錢を貼納しなければならない。従って民で更鈔する資金の無い者は、已に錢を輸して悉く財利を取られており、数十万券が一瞬にして廃棄され、時には朝には豪商であったが、夕には流れ乞食となって川に行つて首をくくる者もいた。<sup>(33)</sup>

この種の法則は、根本的には民に弊害を及ぼし、なおかつ個人的な欲望を満足させるために、朝の令を夕に改めることを惜しまなかったので、当時の朝士が次々に蔡京を弾劾したわけである。淮東提点刑獄章絳は、即ち蔡京の改法は民を誤らせるものだと奏した。<sup>(34)</sup>しかし当時蔡京は、これによって手段と為して寵愛信任を受けることを図っており、全国の怨嗟の声は顧みていない。蔡京が初め改法を議したのは、もともととは時代環境の要求

(32) 同前書182食貨志塩中を参照。

(33)、(34)は次頁へ

に適應させるためであったのが、このように法則は屢々変えられ、誇張、誇示の心から出されたことは否めず、所謂「老姦誤国」であるということ は本当に避けられない。下文で再びこれを論ずる。

(4)蔡京が崇寧年間に鈔法に対して為したその他の措置 崇寧年間に蔡京が鈔法を変えた時、鈔法方面の重要な措置について述べられたものは、合わせて次のようにいくつかある。

鈔価の規定 崇寧2年の改法にあたって、榷貨務に買鈔所が置かれた時、各路の鈔価を規定して勝手に低減することはできず、増減はただ一つの規定の限度内にあるとした。『宋史』182食貨志によれば、以下のことを言っている。すなわち、民間での買鈔の価を定め、これを以て豪強を抑えて辺糴を平にする。河北で鈔を買った者には大体100緡の場合は5,000を、東南末塩鈔は10,000を、陝西塩鈔は5,500をそれぞれ下回ることを許さず、勝手に減ずる者がおれば徒徒の罪を科す。実際には鈔価の高低は、需要が

(33) 宋の翟汝文の『忠惠集』に彼の孫の繁が『重刊翟氏公巽理銘』を附録して「常使見行之法售給，才通，輒復變易，斯商賈以奪民利，名對帶法，客負鈔請塩，扼不即畀，必對元数再買新鈔，方許帶給旧鈔之半。季年又變對帶為循環，循環者，已買鈔，未授塩，復更鈔，更鈔塩未給，復貼納錢，然後給塩，凡三輪錢始獲一直之貨。民無資更鈔，已納錢，悉乾没，数十万券，一昔（「昔」の字は誤りを疑う）敗楮無所用，富商臣賈朝為猗頓，夕至殍丐」と言っており、この文と『通考』16征權3及び『宋史』182食貨志とは大体同じで、若干数字が異なっているだけである。『宋史』372翟汝文伝を調べてみると、汝文は字は公巽、潤州丹陽の人である。

南宋の戴埴の『鼠璞』巻下塩法の条を考証するとまた「自崇寧初，蔡京作茶塩鈔，初俾商人先輸錢請鈔，赴産塩州郡授塩，已而變易，對数買新鈔，帶給旧鈔之半，季年又變為循環法，未幾，復令貼鈔給塩，凡三輪錢，始獲一直之貨。民無貲更鈔，已納錢悉乾没，商賈破蕩，盜販者多，追捕日繁，而盜賊熾矣。皆老姦之誤国也。」と言っている。この文もまた大体同じであるので参考にすべきである。

(34) 章綽一名は、諸書で見るところいろいろと異なる。明の錢穀の『呉都文粹統集』45に引用した宋の孫覿の『宋故左朝大夫公墓誌銘』では章綽と作り、陳邦瞻の『宋史紀事本末』27では章澤と作り、薛應旂の『宋元通鑑』48崇寧2年4月の条では章澤と作り、ただ『宋史』472蔡京伝では則ち章綽と作り、『百衲本』『開明本』ともにこのようになっている。考証する時間が無く慌ただしいので、しばらくは『宋史』に従う。

あるかどうかによって定まり、政府が規定を強制しても何らの効果も無いと。崇寧3年正月27日の尚書省の言によれば、河東等3路の鈔は売買するのに定価が立てられてなく、民間では常に100貫の鈔が65貫以下で売られ、その中でも河東路では最も安くなっていると言っている。<sup>(35)</sup>鈔の価格を限定しにくい原因は、鈔には自然的な水準が存在しているからであることが分かった。

東南末塩鈔の遞牒手続きの改変 商人が鈔を買って産塩の州郡において塩を受け取るのに、いつものやり方は、別に合同遞牒を備えていて鈔を照合して誤りが無ければ支塩していた。しかし「東南末塩鈔遞牒、自来進奏院與常程文字袁同入遞、致有遺失毀棄、使客人往復整會、於鈔法未便。」とあり、崇寧2年12月14日にはその制度を改変して「末塩鈔合同牒、監官面勅使人摺角実封書字用印、給付客人、令自齎前去、仍置籍具注每道姓名字号、候得報給塩鈔毀訖銷注、及給塩訖、限五日報權貨務。<sup>(36)</sup>」とある。この種の方法は、一方では商人にとって便利であり、他方では則ち商人の支請を迅速にさせる。なおこの方法は、蔡京が納入を広く求めようとする目的と関連がある。

金銀を抵当とする請塩法の廃止 元豊の旧制では鋪戸の請塩は、金銀等を用いて抵当とすることが許され、一年を過ぎても償還できなければ没収して官に入れられた。この種の制度に対して、崇寧元年10月に講議司が鈔法を妨げるものと認めて中止を乞うたが、金部の請いによって保留され、結局は一年を改めて半年とされた。<sup>(37)</sup>しかし崇寧2年12月に至って遂に金銀抵当法は罷められた。<sup>(38)</sup>

凡そこの種々の措置は、或いは則ち新鈔法の妨げになることを恐れ、或いは則ち中都に積銭する目的に到達することを欲し、ともに必要なもので

(35) 『宋会要』食貨24崇寧3年正月27日の条の尚書省の言を参照。

(36) 同前書崇寧2年12月14日の中書省の言を参照。

(37) 『長編拾補』20崇寧元年10月壬子の条に引用した楊仲良の『長編記事本末』132の文を参照。

(38) 『宋会要』食貨24崇寧2年12月29日の条を参照。



あった。

(5)大観末の改革 蔡京は崇寧5年(1106)に曾て降職されて開府儀同三司中太乙宮と為ったが、やがて大観元年(1107)正月に再び左僕射を、12月に太尉を授けられ、2年正月には太師に進んだが、3年に台諫が彼の悪いことを交々に論じ、6月に遂に官を辞して引退した。更に4年5月に御史張克公が彼について論じたところのために退かされて太子少保と為り、京師を出て杭州に住居した。<sup>(39)</sup>6月に張商英が尚書右僕射兼中書侍郎と為り、ここにおいて又一回の改革があった。張商英が皇帝の質問に対して答えた奏言は「神宗修建法度務以去大害、興大利、今誠一一舉行、則盡紹述之美法、若有弊、不可不變、但不失其意足矣。」<sup>(40)</sup>であった。これを見て、張商英は蔡京の所謂紹述に対して、根本的には非と為してなく、僅かな更改でよいとしていることが分かる。ここに彼の塩法と関係する方面について、分別してこれを叙述する。

解塩通行区域の復旧及びその措置 解池は水で壊れ、また顆塩も欠産したので、河北・京東の末塩を本来は解塩消費区域であったところに放行した。崇寧4年(1105)に至って解池は復興し、解塩は以前の消費区域に次第に回復した。大観3年(1109)10月に提点陝西等路解塩王仲千は順序に従って西京・河陽・汝州に解塩を通行させることを奏請した。<sup>(41)</sup>また大観4年(1110)7月に、財用を措置するために陝西・川峽路州軍、並びに河東の磁・隰・晋・絳州、京西南路の唐・鄧・襄・均・金・房・隨・郢の8州、京西北路の西京・河陽・汝州等の地区に解塩を行うことを奏請した。<sup>(42)</sup>

解塩は既に復興し、ここにおいて旧法の印鈔によって商人の入中に応副

(39) 『宋史』20徽宗本紀及び472蔡京伝を参考。

(40) 『宋史』351張商英伝を参照。欽定の『統通志』363の張商英伝を考証すると「若有弊」以下数語は無い。

(41) 『長編拾補』28大観3年10月庚寅の条に引用した楊仲良の『長編記事本末』137を参照。『宋会要』食貨24大観3年10月19日の条に所載されているものと『長編拾補』とを考証すると、食い違いがある。

(42) 『宋会要』食貨25大観4年7月28日の条及び楊仲良の『長編記事本末』137を引用した『長編拾補』29同年月乙丑の条を参照。

した。当時財用を措置するには、解塩を展放することと東北塩を処置する方法を決めることであった。『宋会要』食貨25大観4年8月2日の条によれば、

一、今来指揮到日、客人鋪戸買販到東北塩、隨處官司、限三日抄筭見数、於十日内納官驗引、拋元請算数、依市司旬内拘到実直価例收買。其価錢限一月内先以轉運司係省錢支還、如無、即以提舉司市易務錢。又闕、即支提刑司諸色封椿錢充。如有客人鋪戸、敢有隱藏過上件日限、並同私塩法斷罪、仍許人告、給賞如法。如客人願依本處市価細算東北塩者（「細」は「紐」の誤りを疑う）、即於所属出給公拋、前來權貨務算請、往通行路分出売。

一、官売下客人鋪戸東北塩於市易或稅務出売。比熙豐通行解塩日官売解塩銅錢価上、毎斤添錢三文出売。其本錢還逐司依旧椿管。息錢内市易錢以二分與本司、三分與轉運司、五分封椿、候解塩到日、即時住売。

（いずれも原文を記録する）

また『続資治通鑑長編拾補』29大観4年己巳（煇考えるに、錢大昕の朔閏考ではこの月は丁卯がついたちなので3日と為る）の条に楊仲良の『長編紀事本末』137を引用したところを見ると、当時財用を措置したのに関係したのは東京で解塩を展放したことであり、また措置相度した条画は次の項に至った。

一、今来解塩至東京、合經由州県、欲乞令鄆州管下、并中牟・開封府・祥符・陽武県管下、并令通放解塩。

一、今来既令經由州県過行解塩（「過」を「通」の誤りでないかを疑う）、卻乞將昨来王仲千所乞通入京西北路陳・潁・蔡州・信陽軍權住開放。

一、所有添展通放解塩州県、客人已販到東北塩、約束日限、並乞依今月一日已申事理施行（煇考えるに、正に前条を指して言っているが、ただ期日に一日の違いがあり、どちらが正しいのかまだ分からない。）

一、客人自今降指揮到日、已算請出東北塩、元指定東京未到者、今只乞令於所至州軍批引。其在塩場未請出塩者、今後只就塩場批引。其已到京未貨易者、限五日令所委官就都塩院盡数依在市見売毎觔価、全袋拘買、即不得辭折減落、其価錢欲乞令權貨務支還。

一、在京鋪戸買下客人塩、且令依旧零細出売、候都塩院出売日別有指揮。

一、乞令在京鋪戸赴都塩院請買出塩、置鋪零細出売。毎觔官收価錢四十五文足。毎一百斤、支與耗塩十斤、其鋪戸須得依官価出売、不得擅自増長。

一、欲令戸部選委監官一員、不妨本職、專切管勾買売事件。

- 一. 乞就都塩院僻截教屋, 収買客塩。
- 一. 乞就委見差提拳買鈔戸部郎官專切提拳買売塩一宗事務。  
(いずれも原文を記録する)

当時、解塩の方面にあっては旧来の外見を回復したが、これもまた社会環境によるものであった。解池の生産は已に復旧し、その制度もまた復旧される可能性はあったが、東北塩を解塩区域で売ったことは、最初においては已むを得ない処置であった。

東南末塩鈔法に対しての措置 張商英が宰相と為って以後も損益を変通するので、熙寧元豊の旧制度に回復することを議し、その中で最も必要なものは「罷提拳塩香諸路塩事各婦提刑司」<sup>(43)</sup>である。その次は熙寧元豊年間の官売制度を回復することであるが、未だ全部が回復していない前にあって、旧鈔はどのように整理するのか? 『宋会要』食貨25大観4年8月15日の条によれば

「措置財用所乞議定五等旧鈔, 立定貼納錢, 分算換度牒・告敕・香藥・雜物・東北塩外, 所有客人已換請到新鈔(煇考えるに, 「新」は原文では「雜」, 『宋史』182食貨志によって改める) 及見錢鈔不曾封帶鈔者, 理合先次支給東南末塩, 依旧許商旅請往逐路貿易, 可速與指揮下淮・浙塩場塩, 將見在并接統買到塩椿留五分, 準備將來諸路商賈轉廊,<sup>(44)</sup> (「廊」は原文では「廓」となっているが誤り) 算請, 其余五分, 許支還客人鋪戸等 (「鋪」は原文では「錢」 『宋会要』食貨25大観4年間8月12日の条によって改正する) 請到新鈔, 及見錢鈔, 不曾對帶旧鈔, 合先次支塩者, 庶公私兩便, 熙豐鈔法早見就緒」

とある。

詔はその請いに従わせた。これによって則ち崇寧以来の貼三・貼四・貼五・当十鈔・河北見鈔文挺等5種の旧鈔を、度牒・官告・雜物・香藥・東北塩等を以って換易した。また当時の新鈔, 見錢鈔, 及びまだ對帶していない鈔は、全部東南塩を以って商人の鋪戸に償還させた。商人が五等の旧鈔を以って新鈔に換請するに至っては、對帶法を用いずして増納法を用いた。初めに議して貼三鈔は權貨務において更に見緡七分を貼納することを

(43) 『宋史』182食貨志塩中を参照。

(44)は次頁へ

許し、貼四鈔は更に六分を貼納、貼五鈔は十鈔に当たり七分を貼納することとを許し、河北の見銭文拋の貼五分は新鈔に換請することとした。後に議

- (4) 「転廊」とは何か? 字面からは的確な解釈は得難い。宋代の塩法を記載した中で、『宋史』食貨志、『宋会要』では常にこの語は見られる。この語は又多くは大観以後の記載の中に用いられているが、その淵源については未だ考察されていない。「廊」の字はどういう意味か、宋代において重修された『広韻』下平聲卷21唐廊字下に『廡也、文穎曰、「廊、殿下外屋也」』と言っている。更に許叔重の『説文解字』にさかのぼれば、また「廊、東西序也」と言い、特別に意味は無い。所謂「廊」は殿前兩傍の廡を指して言うのである。『宋史』182食貨志塩中を考証すると、「客人在京榷貨務買東南末塩者、其法有二、一曰見錢入納、二曰鈔面転廊」とあるが説明した所は無い。

著者本人の知るところに就いては、この語は宋の徽宗の大観年間に起こったように、以前の記載ではこの語の用いられ方は少なく、以後もまた見ることは少ない。大抵は榷貨務所管の塩鈔を事務する所を指し、たとえ同じ場所にあるとしても、東南東北塩等は部屋を分けて処理しており、各々が一廊を持っていたであろう。もし東北鈔を以て東南塩を請うならば、処理手続き上この廊からあの廊へと転じ、故にこれを転廊と言ったのであろう。『宋会要』食貨27の38乾道8年正月17日の条を考証すると、

「左司郎中提領榷貨務都茶場韓元吉等言、近拋塩客方訥陳論榷貨務長史王昉等侵使過算請塩鈔関会寄廊銀共七千四百余貫…」

とある。これは所謂寄廊は、商人が寄存銭銀関子会子等で榷貨務の廊において、塩鈔を請うことを指して言っていることは明らかである。転廊の廊は、この種の廊を指すのであろう。又南宋と金人の貿易時に事務を処置する榷場はまたこれらの廊にあり、一つの証明を提供する。李心伝の『建炎以来繫年要録』145紹興12年5月乙己の条に、

「軍器監主簿沈該、直秘閣、知盱眙軍、措置榷場之法、商人貲百十以下者、十人為保、留其貨之半在場、以其半赴泗州榷場博易、俟得北物、復易其半以往、大商悉拘之。以待北價之来、兩辺商人各処一廊、以貨呈主管牙人、往來評議、毋得相見」

とある。

吾々は、売買・交易を管理する機関には廊が多くあることは想像がつき、後者の廊はその間にあって、処理する事は必ずしも前者と相同じではないにしても、廊の性質はともに異なることは無い。著者が廊と認める所以は、即ち榷貨務は塩鈔、交易の辦事処であり、辦事処が主管する鈔塩事務は全部が同じではなく、従って転廊は即ち辦事処のこの方からあの方へ移ること、これを辦理というからである。

して河北の見銭文匱は減じて二分を増納させ、残りは各々二分を減じて告救、度牒・香藥・雜物・東南塩を以って塩を算請すれば給償することとした。<sup>(45)</sup>

当時東南塩は極めて官般官売が回復し、諸路の州軍から督促されても塩貨は充分に準備され、大量に貯蔵されて「務要遠塩揚州軍及一年之数、近塩揚州軍及半年之数以上」<sup>(46)</sup>とある。一方では官売の準備がなされ、また一方では商人が三路の新法の文鈔を用いて転廊して算請することを許した。並びに左司員外郎張察に詔して、官を東南六路に派遣して転運提刑司に的確にその利害を講究させ、<sup>(47)</sup>また東南六路の官売の塩価を均定させた。<sup>(48)</sup>

要するに、張商英が宰相と為って以後、蔡京の失敗を正したく、解塩の方面ではももとの消費地区を回復し、重ねて新しく鈔を出して沿辺の糴買に応副させ、東南末塩は官般官売制を回復することを企図し、その上に商人が沿辺三路の鈔を用いて転廊して算請することを許した。旧鈔については整理して、実際にはまた大きな変更は無く、ただ少しの損益しかなかった。

(45) 『宋史』182食貨志中を参照。

(46) 『宋会要』食貨25大観4年閏8月25日の条を参照。

(47) 同前書同年月26日の条を参照。

(48) 同前書政和元年3月21日の条の左司員外郎張察の奏を参照。